

下鴨少年補導委員会
松ヶ崎支部

発行責任者
支部長 北川 憲一

松ヶ崎少年補導だより

教えてください！

松ヶ崎小学校平成二十三年度PTA会長

河瀬 元明

自分探しを続ける人は昔からときどきいました。やりたいことがみつからない、それは起こりえることです。幼いころからの夢をもち続ける人、突然何かに目覚める人、使命感で働く人、適当なところで手を打って妥協する人、なんとなく選んだ道をなんとなく歩き続ける人、いろいろありえますが、ともかく一つの道を選び人生を進めていく人がほとんどです。でも、道を決められない人もいます。責めているのではありません。多様な人がいることは、むしろいいことだと思えます。それは、文化を豊かにし、発想の幅を広げイノベーションをもたらし、変化への社会の迅速な対応を可能にすることだからです。

人生死ぬまで勉強だ。私の技術などまだまだです。満足のいく作品はまだ作れたことがない。そういう話を聞くことがあります。飽くことを知らない探究心、理想を求める完全主義というのは尊敬に値します。一方、誰もが知っているように、近代社会は役割分担によって成り立っており、作物を育てる人、家畜を育てる人、車を作る人、電車を走らせる人などなど、誰もが少しずつ役割を分担して社会をまわっています。それぞれが

それぞれの道の専門家です。例えば、私は半人前ですという建築家に家を建ててもらおうとは思いません。自信のある、できれば達人に家を建ててもらいたい。酒をよくくしているバーテンダーに一杯頼みたいわけです。

これら二つは矛盾しているのでしょうか。そうではないことはご存知の通りです。前者は、友人の中のレベルの問題、後者は素人と友人の違いの問題です。完璧を目指す人はまだ完璧ではないということになります。半人前なのかということではなく、一人前で合格点どころか優秀な専門家がさらに高みを目指す。それが人生死ぬまで勉強だということでしょう。そこには謙遜された自信が感じられます。今日の出来は八十点、だから今日は湯葉は売らない、ということではないわけです。自己評価六十点でもとても美味しい湯葉を作る人の話なのです。

ここ五年くらいでしょうか。大学生たちがとても勉強熱心になっています（もちろん皮肉です）。わからないことがあると「教えてください」「もっと勉強したいです」と「もっと勉強したいです」あるいは「自分自身を高めていきたいです」などと答える。この勉強し

たがる若者たちは、謙虚なのか。そうではないのではないかと恐れています。建前ではなく本気なのです。つまり彼らは、誰かが答えを知っていて、教えてくれる。自分はそれを覚えればいいと考えているのではないかと思えます。子どもなのです。甘えているのです。誰かが助けてくれると思っているのです。私にはそう思えてなりません。早く何かの技術を身につけて、主体的に自分でその何かをしてみたいという気概が感じられませんが、勉強しないといけません。もしかすると、勉強しないにもかかわらず習得するのは不可能だと最初から諦めているのかもしれない。

昔は大してできもしないのに一人前の口をきき、人に訊くべきことまで勝手に自分で考えてやってしまったものです。裏打ちされていない自信だったとは思いますが。謙虚に勉強するべきだったとも思えます。でも、少なくとも自分でやるんだと言う気概はあった。どちらに極端でもいけないということなのでしょう。その中で今は甘えた側に振れ過ぎているということなのかと思えます。だからこそいまは、早く一人前になりたいと思えと子どもたちに言わなければなりません。完璧ではなくても専門家の自覚をもってそれにもなう責任を負う覚悟をもつべきです。そういう人しか信頼されえない。そういう人にしか何かの仕事を頼みたいとは思わない。自分が何を知っていて何を知らないのか、何を理解できていて何を理解

できていないのか、それすらわからないような半人前では困ります。向上心にあふれているのに、野心や欲や冒険心がない。例えば海外を歩いて回りたいだとか、外国の大学で勉強してみたいという人は確実に減ってきています。内向き志向と言われています。夢を見られるような社会ではないから。いまの社会を作った大人の責任をあげる人もいます。なるほどそうです。大人の側が子どもに冒険させない楽な道を選んでいないことも反省します。自分の掌の上でしか自由にさせられないのでは、世代を重ねるごとに人間は小さくなってしまふ。大人にも覚悟が必要なのではないでしょうか。



正田町 S.S. さん

高校の卒業式で、まっとうな自信をもつべきだ。早く一人前になりましょうという話をしました。中学の卒業式では、人類の英知は膨大だ。得手不得手がでてくるのは当然だと話しました。さて、小学校の卒業式ではどう話しましょう。小さい子ほど説明するのは難しいです。

どの子にも 手のぬくもりを さしのべる

「鏡」で「鑑」

京都市立松ヶ崎小学校
教務主任 久保賢洋

「門前の小僧、習わぬ経を読む」
この「ことわざ」は最近あまり聞かなくなつたように思いますが、いかがでしょうか。

身近な例では、かけ算の九九があります。上の子たちが二年生になつて、家で毎日九九を、一生懸命に唱えて練習を繰り返していると、しまいは本人だけでなく、それを何気なく聞いていた下の子どもも覚えてしまふ、というご経験はないでしょうか。

このように、毎日同じことを繰り返し返し耳で聞いていると、自然に脳に刻まれて覚えていくものです。特に、子どもは脳が柔軟で記憶力も旺盛ですから、耳から聞いて覚える力は子どもほど強いでしょう。さて、ここで大切になってくるのが、この毎日繰り返し聞いている中身、ことわざでいえば「経」に当たる部分です。お経というくらいですから、おそらくは「いいこと」「ためになること」でしょう。上の例の「九九」もそういうところが、そうでない場合が問題です。

先日、教師をしている友人からこんな話を聞きました。「クラスのある子どもが友だちと言い争いになった時、きまつて『ボケ、死ぬ』という言葉を出すので、どうしてそんな言葉を使うのか聞いてみたのです。すると、『家で怒られるとき、いつもそう

言われるから』と言うのです。多少の言い訳もあるでしょうが、きっとその子の家では、子どもを叱るとき、その子だけでなく兄弟姉妹にもそのような言葉が発せられていて、それを耳にすることが日常茶飯事になつていたのでしょう。」

また、元保育園長で、現在ある大学で教鞭をとつておられる方と以前に話をしたときのことです。

「保育園でも、子どもたちは『アホ』『ボケ』『ウザイ』『死ぬ』『カス』というような言葉を言いますか。」「何歳ごろか言うと思いますか。」「との問いかけに、『三歳ぐらいからですか。』と答えたとき、即座にこうこたえられました。

「いいえ。一歳前後からです。そのような言葉が日常飛び交っている家庭では、子どもが言葉覚えて段階で、そのような言葉は、すでに子どもの脳にインプットされています。だから、言葉が出る時期になると、そのような言葉が自然に出るのです。もちろん最初は意味を理解して言っているのでは

ありませんが、それが口癖になりしだいに「負の感情」を出す時に使うものだと認識していくのです。残念なことに、そういった類の言葉ほど、脳に刷り込まれやすいのです。」
私はこれを聞いて、大変に驚きました。

さて、そんな中でも先日、こんな場面に出会いました。あるお家で昼食をとっていた時のことです。一組の親子、お父さんと三、四歳と思われる女の子が食事をしていました。食事を終え、お父さんが店主に代金を支払って、「ごちそうさま。ありがとう。」と言いな

らがお店を出ようとしたときです。そのお父さんに手を引かれたその女の子は、店主の方をふり向き、父親と同じように「ごちそうさまでした。ありがとう。」と言ってお店を後にしたのでした。

私はこの光景を見ながら、この親子はきっといつもこうなんだろうなと思いました。この女の子は、おそらく理屈ではなく、お父さんがいつもしている姿を見て、それを自分もまねをするところから始まり、そして、それが習慣になつていったのでしょう。

「三つ子の魂百まで」ということわざがありますが、小さい子どもの中に身につけたことは、少年期、青年期を経て、大人になつてからも、ずっと身についたままであることが多いと思います。子どもに対して、同じ身につけさせるのなら、よい習慣を身につけさせたいものです。きつとそれは、子どもにとって無形の宝物になるはずですよ。

子どもは私たち大人を見て、まねして大きくなっていきます。特に小さい子どもは、周囲の大人の影響を大きく受けるものです。子どもは大人の姿を映す「鏡」です。私たち大人は、子どもにとつての「鑑」となつていきたいものです。

窓

マイコーナー

コミュニティスクールについて

松ヶ崎自治連合会

会長 岩崎猛彦

「松ヶ崎の子供は松ヶ崎が守り育む」松ヶ崎小学校は明治六年四月十八日に創立、村人がつくり、村人が運営した、まさに「地域立」の学校だったので。

昭和六年に松ヶ崎村も京都市に編入、学校も統廃合を繰り返しながら、昭和二十二年に京都市立松ヶ崎小学校と改称され、現在に至っています。

近年、少子高齢化社会、情報化社会、国際化社会、環境問題の対応等、社会の急激な変化や、人々の価値観の多様化により教育のニーズが学校教育だけでは対応することが困難になってきておりまして。そこで政府は平成十六年三月に「新しいタイプの公立学校」として学校運営協議会の設置（コミュニティスクール）を閣議決定しました。松ヶ崎小学校も検討の結果、平成十九年三月に学校運営協議会組織を設置、コミュニティスクールとしてスタートしました。

松ヶ崎小学校に学校運営協議会が設立され、学校の「よき応援団」「よきご意見番」として学校運営に参画して、もう五年が過ぎようとしております。京都市教育委員会から委嘱された、主に学区民からなる十五名の理事（地域団体の代表者、PTA役員、京都工芸繊維大学、学識経験者等）により理事会が構成され、その下に企画推進委員会として保護者や地域住民の協力で「学び、子ども安全読書、広報、放課後学び教室」の五部会が設けられ活動をしようになりました。

「松ヶ崎だより」やホームページ等により学校情報の丁寧な発信や学校評価の公表等、説明責任を果たすことよつて、開かれた学校づくりに取り組み、地域学区としては学校を支え、子供の教育に関わつていこうとする等、公立学校の運営スタイルが新しく試みられ

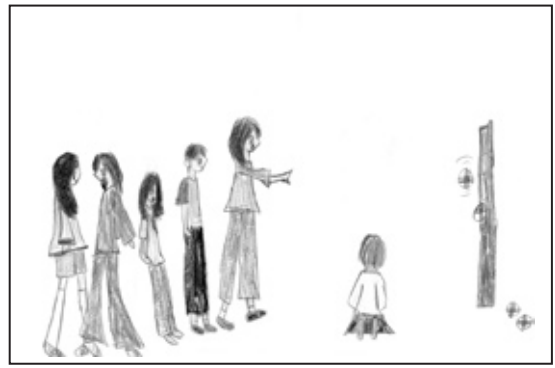
私も当初から理事の一員として携わり、三年目から理事長を拝命することになりました。当初、校長先生から子ども達のために何が出来るか「できることを、できるときに応援して欲しい」とよく言われました。まったく教育行政に不縁な私にとりましては、雲をつかむようでしたが、色々な折に出るだけ学校に顔を出すようにしておりますと、次第に「地域学区の顔は小学校にあり」と先達が言つた言葉が思い出され、まさに小学校が重要な松ヶ崎学区のシン



11月30日発

きょうは学校のこともフェスティバルへ行きました。はじめにスライムを仕上げた赤色をしました。つぎはゲームをしました。ゲームはまわりかみやボールリングサイコロゲームなどもいろいろありました。たいくかんの中を友だちとメーロのようにならなごまわりました。せんぶまわってせいに花たはのケツゴムでボールをまわしました。たごせんべいもおいしかったです。おうぐんはお昼にたべました。キンデーティングゲーム、フルチョがあたりました。いかに友だちとインターロッキングでボールでスライムをあそびました。いろいろあつたのしかたです。また行きたいです。

松ヶ崎小学校 二年二組 飯室一花



わたしは、友だちといっしょに、まづがキーンフェスティバルに行きました。体いくかんの中にあったゲームがたのしかったです。とくにたのしかったのは、わなげとまごあつです。あなげでは、一つだけ外してしまいました。かあとは、金ぶ入り、うれしかったです。まよとまごあつは、すこし外しましたが、まよをねらって、なげるのがたのしかったです。

来年もまた、まづがキーンフェスティバルに行きたいです。

松ヶ崎小学校 二年一組 林 夏子



子供フェスティバル (十一月三日)

うどんコーナー・ゲームコーナー・しめなわコーナー・消防団コーナー・PTAの方のコーナー・ロッククライミングなどで楽しい一日を過ごしました。

ボル、中心施設でなければと思うようになり、学区との連携をより深める為にも、学校運営協議会発足三年目に松ヶ崎自治連合会の各種団体の仲間に入れて頂きました。校長先生はじめ教職員の皆様は、創意工夫と努力により子ども達の学力向上はもとより、規範意識の向上等に一生懸命に取り組んで頂いています。学校運営協議会も、学校と連携し子どもたちの育成また安全のために保護者、地域住民の皆様方のご協力のもと、教育環境づくりに支援活動を充実すべく努力をしています。

校長先生が年初作成した「学校経営方針」、学校評価システムによる評価結果等基本方針を理事会で検討・承認すると共に、各部署も色々と趣向を凝らし、子ども達の為に支援活動を続けております。尚、活動内容につきましては、定期的に「松ヶ崎コミュニティ・ニュース」を発行、回覧しております。また、松ヶ崎自治連合会のホームページにもコミュニティ・ニュースを掲載しておりますので、是非ご覧頂きたいと思っております。

松ヶ崎自治連合会も、松ヶ崎少年補導委員会の皆様と、小学校の教育環境づくりの応援を行い、小学校がより活性化することにより、非行のない、安心・安全な町づくりに繋がるものと大いに期待しています。どうかコミュニケーションスクールに対し学区皆様方のご理解とご協力をお願い致します。

平成二十三年度
表彰受賞者

平成二十三年度の受賞者は左記の方々です。おめでとうございます。

受賞者の皆様のさらなるご活躍とご協力を祈念いたします。

京都市少年補導委員会
会長表彰

銅賞 山田 清美

大谷 泰子

岩崎 千鶴

下鴨単位少年補導委員
会長表彰

下鴨優良補導委員

田中 格夫

支部活動
状況報告

前号に引き続き、当支部のその後の活動状況につき、ご報告いたします。

1 九月三十日 松ヶ崎少年補導

だより第五十三号を発刊し、

三〇〇部を印刷、市政協力

委員さん、隣組長さんらのご

協力により、全世帯、関係機

関に配布いたしました。

2 十月二日 第五十七回区民運

動会に協賛参加いたしました。

3 十月十一日 支部役員会

第二十六回子供フェスティバ

ルについて、催し内容や役割

分担について検討いたしまし

た。

4 十月十六日 京都アスニーに

て行われた表彰と研修会に出



席いたしました。

10 十月二十五日 支部役員会

第二十六回子供フェスティバ

ルについて催し内容、役割分

担の最終確認を行いました。

11 十一月三日 第二十六回松ヶ

崎子供フェスティバル

ボランティアアキッズやおやじ

の会にお手伝い頂き、楽しい

一日となりました。

12 十一月十日 支部役員研修会

及び懇親会をアピカルインに

て行いました。フェスティバ

ルの反省や来年に向けて話し

合いました。

13 十一月十日 標語掲出

七月に選出された非行防止標

語を校区内に掲出しました。

14 十一月二十一日 京都工芸織

維大学学園祭構内パトロール

十二月十一日 国立京都国際

会館で行われた表彰伝達式、

並びに委員研修会に参加しま

した。



当支部より四名の委員が受賞

致しました。なお受賞された

委員の氏名は上記に掲載して

いますのでご覧下さい。

15 一月九日 アピカルイン京都

で行われた松ヶ崎消防分団出

初式に出席しました。

16 一月二十一日 松ヶ崎児童館

主催のおもちつき大会のお手

伝いをしました。

17 三月二十一日 松ヶ崎少年補

導だより第五十四号の編集会

議を行いました。

その他、青色回転灯装着車によ

るパトロールを不定期に行つて

います。

また、毎月第四金曜日に古紙回

収を行っています。皆様のご協力

に感謝いたします。

以上ご報告申し上げます。

支部長 北川 憲一

少年補導の歌

東 政治郎 作詞
蔵田 春平 作曲

一、明るい街に 人は和し

明るい家に 子は伸びる

大人子供は しっかりと

心をつなぎ 手をつなぎ

何でも話す 子になろう

何でも聞ける 親になろう

二、涙する子は ふいてやり

迷える子には 道教え

許し励ます 親心

子供は親の 鏡なら

我が子他人の 区別なく

みんなでもともとそう補導の光

三、善意はみゆる いつの日か

あの子はかえる 夢さめて

貫く愛に 真実に

こたえてくれた 子の笑顔

その喜びと 使命こそ

消してはならぬ 補導の灯